

# 「変項名詞句」としての 「量関係節」「潜伏疑問」「主要部内在型関係節」

西垣内 泰介

## 1 「変項名詞句」

この論文では西山 (2003) によって「変項名詞句」と呼ばれている言語表現と、それに関連するいくつかの構文について考察する。「変項名詞句」とは、次のような表現である。

- (1) a. 洋子の趣味  
 b. タカシの身長  
 c. 奈緒美のケータイ番号  
 d. ビールの量

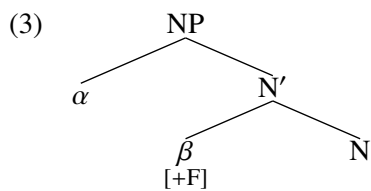
これらの表現は、「値」を表す表現を焦点とする「指定文」を形成することができる。

- (2) a. 海外旅行が洋子の趣味だ。  
 b. 185cm がタカシの身長だ。  
 c. 090-1234-1234 が奈緒美のケータイ番号だ。  
 d. 2リットルがビールの量だ。

この論文では、西垣内 (2015) で提案されている「指定文」の分析を発展させ、「変項名詞句」を基本として、「量関係節」、「潜伏疑問文」さらに比較構文のあらたな分析の方向性を示していく。

## 2 「中核名詞句」と「指定文」

本論文では、分裂構文以外で述部に名詞を持つ指定文は、次のような2項をとる名詞句中核として派生するという西垣内 (2015) の分析をその基盤として仮定する。このような名詞句中核を「中核名詞句」と呼ぶ。



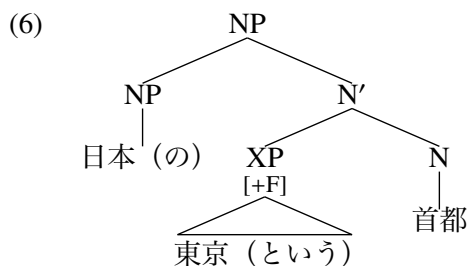
- (4) 「中核名詞句」の主要部 N は、外項  $\alpha$  が N の意味的領域を限定 (delimit) し、内項  $\beta$ [+F] が  $\alpha$  によって限定された N の意味内容を「構成する」(constitute) 意味内容を持つ範疇である。

「中核名詞句」の主要部となれるのは西山 (2003) が「非飽和名詞」と呼んでいる「本場」「主役」「作者」などが典型的だが、この種の名詞の特徴は、2つの項をとり、名詞句で表される「個体」だけではなく、「事象」などさまざまなタイプの言語表現の間の「関係」を表すところに重要なポイントがある。

西垣内 (2015) による日本語の「指定文」の例 (5) の分析の概略をを提示する。

- (5) 東京が日本の首都だ。

我々の分析での (5) は、「首都」を主要部とし、内項に「東京」、外項に「日本」をとる名詞句を中核として派生される。



ここで前提とされているのは関与する名詞が複数の項を持つことで、その外側の項  $\alpha$  として「日本」が現れて、「首都」の意味領域、つまりどこの首都であるかを限定 (delimit) する<sup>1</sup>。内項  $\beta$  を占めるのが「東京」で、「日本」によって限定された「首都」を「構成する」「過不足なく指定する」という関係が成り立っている。

- (7) 東京が [日本の  $x$  首都] だ。  
 value of  $x$           variable          copula

「中核名詞句」(6) の内項で [+F] の素性を持つ「東京」が焦点化によって取り出され、「変項」としての痕跡を作り、この変項を含む構成素「日本の  $x$  首都」の意味内容を過不足なく (exhaustively) 指定するという (4) の要件を満たしている<sup>2</sup>。

<sup>1</sup>Higgins (1973: 213) は英語の「指定文」(日本語ではむしろ倒置指定文) について次のように述べている。

「主語」が領域を限定 (delimits a domain) し、「述部」がその領域に属する成員を特定する。

このような「指定文」の「主語」の役割を Higgins (1973: 219) は「見出し書き」(Superscriptional) あるいは「リストの見出し」(heading of a list) と呼んでいる。述部が、リストの項目である。

われわれの「中核名詞句」は、主要部と指定部が「見出し」に相当するものを、内項がリストの項目に相当するものを形成して、「指定文」を成立させる要因となる要素を内蔵した名詞句と考えてよい。

<sup>2</sup>西山 (2003: 76) は、

### 3 「変項名詞句」のヴァリエーション

#### 3.1 構造と派生

われわれの分析では、(2)の文は「値」を表す表現を内項とする「中核名詞句」から派生される。

(8)  $[_{NP}$  洋子の  $[_{N'}$  海外旅行 (という)  $[_N$  趣味]]

「値」を表す表現が内項であることは、次のような「変項名詞句」を含む「指定文」で「自分」の逆行束縛と見えるものが可能であることによっても確認できる。

(9) 自分<sub>i</sub>の親の家 (の住所) が 洋子<sub>i</sub>の住所だ。

この文は、次のような「自分の親の家 (の住所)」が内項として「洋子」に $c$ 統御される位置にある「中核名詞句」から派生される。

(10)  $[_{NP}$  洋子<sub>i</sub>の  $[_{N'}$  自分<sub>i</sub>の親の家 (の住所) (という)  $[_N$  住所]]

西山 (2003: 86–89) が指摘するように、「変項名詞句」は「指定文」だけではなく、次のような変化を表す構文で使うことができる。

(11) 洋子の住所が 変わった。

われわれの分析では、この文の「洋子の住所」は、「値」を表す内項が文字通り「変項」である「中核名詞句」から派生すると考える。では、その変項はどのようにしてもたらされるのか？ われわれは、「中核名詞句」の内項の位置に演算子 (Op) が派生に導入され、これが DP 指定部に移動することで内項の位置に痕跡 ( $t$ ) ができると考える。

(i) a. 洋子の指導教授はあの一とだ。(西山 2003: 75, 例 (32a))

b. あの一とが洋子の指導教授だ。(西山 2003: 75, 例 (33a))

について、次のように「変項名詞句」にもとづく説明をしている。

[(ia)] は,

(ii) [x が洋子の指導教授である] を満たす x の値はあの一とだ。

を言わんとする文であると思われる。倒置指定文「A は B だ」の A が指示的でないという理由は、A が、[x が洋子の指導教授である] という命題関数を表示していることにある。このような名詞句 A を筆者は「変項名詞句」と呼ぶ。変項名詞句は、論理的には 1 項述語であるといってさしつかえない。…変項名詞句は、(iii) のように、変項を埋める値をさがし、それを B によって指定するという緊張関係を表示しているのである。

(iii)    A    は B だ  
          [...x...] 値  
          ↑     |

ここでいう「変項名詞句」がどのような形で「変項」を含むのか、統語構造との関係は不明である。また、「変項名詞句」は「1 項述語」と言われており、われわれの分析での「中核名詞句」が 2 つの項を含むと考えている点でも異なっている。

(12)  $[_{DP} Op_i [_{NP} \text{洋子の } [_{N'} t_i [_{N} \text{住所}]]]]$

この派生は、「中核名詞句」の内項をその直上にある機能範疇の指定部へ移動することを含む点で、2節で示した「指定文」の派生と似ている点に注目していただきたい。DP 内部で演算子による変項束縛が起こり、英語の疑似分裂文の wh 節に似た構造が実現している。

意味論的には、この演算子-変項の関係はラムダ演算子 ( $\lambda$  Operator) による変項束縛に相当し、それによって「洋子の住所」という関数を取り得る「値」の集合を表すと考えられる。

(13)  $\lambda x \text{ 住所 (洋子, } x)$

### 3.2 「潜伏疑問」

西山 (2003: 78–86) で議論されている「潜伏疑問」を含む文は、「変項名詞句」と基本的に同じ構造をもっている。

(14) 警官が洋子の住所を尋ねた。

「潜伏疑問」は、統語的な選択関係から考えて DP ではなく CP であると思われる。従って、ここでの「洋子の住所」は (12) と同じだが、関与する機能範疇が DP ではなく CP であると考えられる。

(15)  $[_{CP} [_{NP} \text{洋子の } [_{N'} Op [_{N} \text{住所}]]]] \Rightarrow [_{CP} Op_i [_{NP} \text{洋子の } [_{N'} t_i [_{N} \text{住所}]]]]$

この「中核名詞句」の内項を占める演算子 Op は WH 要素「どこ」と等価である。

(16)  $[_{NP} \text{洋子の } [_{N'} \text{どこ } [_{N} \text{住所}]]]$

この内項を占める「どこ」を補文の中で焦点化することで (14) と意味の近い間接疑問を含む文を得ることができる。

(17) 警官が [どこが洋子の住所 (である) か] を尋ねた。

## 4 「量関係節」

### 4.1 「量関係節」の構造と派生

(1d) の、われわれが「中核名詞句」で外項の位置を占めると考える要素を、関係節で修飾して複雑にすることができる。

(18) 2 リットルが タカシが飲んだビールの量 だ。

(18) の、下線を施した部分がわれわれが考える「量関係節」(amount relatives) (Carlson 1977) の日本語で実現する形の原型である。われわれは、(18) は次のような「中核名詞句」から派生すると考える。

(19) [<sub>NP</sub> タカシが飲んだビールの [<sub>N'</sub> 2リットル (という) [<sub>N</sub> 量]]]

この「中核名詞句」の指定部に現れる関係節の主要部「ビール」、そして「中核名詞句」の主要部「量」のいずれかを発音しない空名詞とすることができる。

- (20) a. 2リットルがタカシが飲んだ~~ビール~~の量だ。  
 b. 2リットルがタカシが飲んだビールの~~量~~だ。

次のような「倒置指定文」では、両方を空名詞とすることが可能である。

(21) タカシが飲んだ~~ビール~~の量は、2リットルだ。

(20a)で発音される「タカシが飲んだ量」をそのまま関係節の構造から派生すれば、「\*タカシが量を飲んだ」という関係を含んでしまうという問題があるが、われわれの分析では「タカシが\_\_飲んだ」は「中核名詞句」の指定部に含まれる要素、「量」は「中核名詞句」の主要部をなす要素で、異なる位置に由来するものである。

「中核名詞句」(19)の内項から演算子を移動することで、「値」を表す部分を変項とし、次のような変化を表す文に用いることができる。

- (22) a. タカシが飲むビールの量が増えている。  
 b. タカシが飲む~~ビール~~の量が増えている。  
 c. タカシが飲むビールの~~量~~が増えている。

これらの文には次の「中核名詞句」を含む構造が関わっている。

(23) [<sub>Op<sub>x</sub></sub> [<sub>NP</sub> タカシが飲んだビールの [<sub>N'</sub> x [<sub>N</sub> 量]]]]

次の節で、「量関係節」の主要部を占める名詞の特性について考察する。

#### 4.2 「量関係節」の主要部名詞

この節では、「量関係節」が本分析で主張する「中核名詞句」を含む構文のひとつのヴァリエーションであることを示す現象について考察する。

西山(2003: 290-295)は、次の菊地(1996)によって指摘された「一部」と「全部」(「総額」)の「指定文」に関連した相違について考察している。(例文は変更を加えている。)

- (24) a. 100万円が慰謝料の総額だ。  
 b. 慰謝料の総額は100万円だ。  
 c. 慰謝料は100万円が総額だ。

- (25) a. 100万円が慰謝料の一部だ。  
 b. 慰謝料の一部は100万円だ。  
 c. 慰謝料は100万円が一部だ。

菊地 (1996) にも、また同論文を引用している西山 (2003) にも文法性ないし容認性の判断が表示されていないが、(25) が (24) に比較して容認性が劣ることが指摘されている。

本分析の立場からは、(25) の容認性が低いのは (24) の「総額」が定義可能な部分 (例えば「全体」と同額を表す「部分」) を表す概念であり、ある金額が「総額」を「構成する」と言えるのに対して「一部」は定義できない部分を表す概念であることによる。「一部」と言われてもどこまでが「一部」に入るのか入らないのか、ことばの意味から決定することができない。「一部」はわれわれの定義 (4) を満たしていないので、「非飽和名詞」ではなく、「中核名詞句」の主要部になれない。

この考え方が正しい方向を指していることは、問題の構文では「総額」だけでなく「半額」「75%」など定義できる下位部分を表す名詞を使うことはできるが、「一部」だけでなく「大部分」も使うことはできないなどの事実によって支持される<sup>3</sup>。

この区別が、「量関係節」の解釈に影響を与えるのである。「量関係節」のヴァリエーションとして Ishii (1991) などによって分析されている「『半分』関係節」(half-relatives) という構文が議論されてきている。

- (26) マリが1ヶ月に稼ぐ半分以上をタカシがギャンブルに使う。

ここでのポイントは、タカシが使うのはマリが稼いだお金である必要はなく、タカシがギャンブルに使うお金の額が問題であって、マリが50万円稼ぐとすればタカシが25万円ギャンブルに使うということである。

それに対して、(26) の「半分」を「一部」「大部分」にかえてみよう。

- (27) マリが1ヶ月に稼ぐ{一部/大部分}をタカシがギャンブルに使う。

この文では、「一部」「大部分」いずれを使っても、タカシがギャンブルに使うのはマリの稼いだお金であるという解釈しかあり得ない。つまり、(27) では「量関係節」の解釈が成立していないということである。

(26) と (27) の対比は、次の「指定文」の容認性の対比と対応する。

<sup>3</sup>西山 (2003: 270) は次のように述べている。

「ほとんど」「すべて」「大部分」「半分」「一部」「15%」などの数量を表す表現は、…飽和名詞か非飽和名詞かで分類するのが意味のないタイプの名詞であるかも知れない。

われわれにとっては、「すべて」「半分」「15%」は非飽和名詞、ほかのものは飽和名詞と言えるかは明らかでないが、非飽和名詞ではない。

- (28) a. 25万円がマリが1ヶ月に稼ぐ{半分 / (総) 額}だ。  
 b. \*25万円がマリが1ヶ月に稼ぐ{一部 / 大部分}だ。

(28a)に見られる「量関係節」は、次のような「中核名詞句」から派生される。

- (29)  $[_{NP}[マリが稼ぐお金] [_{N'}25万円 (という) [_{N}半分 / (総) 額]]]$

この構造の内項「25万円」を焦点化し、(20)で見たように、「中核名詞句」の指定部の関係節の主要部を削除することで(28a)が得られる。

- (30) 25万円がマリが1ヶ月に稼ぐ~~お金の~~{半分 / (総) 額}だ。

「半分」は復元可能性の理由で削除できないが、「(総) 額」は削除することができる。

- (31) 25万円がマリが1ヶ月に稼ぐ~~お金の (総) 額~~だ。

「お金」と「(総) 額」の両方を削除すると、「倒置指定文」なら容認性の高い例文が得られる。

- (32) マリが1ヶ月に稼ぐ~~お金の (総) 額~~は25万円だ。

(30)に関連して、Ishii (1991)の「『半分』関係節」の分析では、「お金」の削除は含まれておらず、空演算子(empty operator)が移動する方法がとられている。

- (33)  $[_{NP}[_{CP} Op_i [_{C'}[_{IP} \dots t_i \dots ]]][_{NP} 半分]]$

われわれの分析のフォーマットに則して言うと、演算子移動が「半分」を主要部とする名詞句の指定部の中で起こる。Ishii (1991)は、彼の演算子移動を支持する議論として、次の例文に下接条件(Subjacency)の効果が見られることをあげている。容認性判断はIshii (1991)のものである。

- (34) a. ??John は [Mary が [[自分の妹が \_\_ 稼いだ] 事実] を認めた] 倍を稼ごうと思っている。  
 (Ishii 1991: 226, 例(6))  
 b. ??John は [Mary が [\_\_ 稼いだ から] ヨーロッパに行った] 半分も 稼がなかった。(Ishii 1991: 226, 例(7))

しかし、これらの例文の容認性は、含まれている関係節の容認性をそのまま反映したものと考えられる。

- (35) a. ??[Mary が [[自分の妹が \_\_ 稼いだ] 事実] を認めた] お金  
 b. ??[Mary が [\_\_ 稼いだ から] ヨーロッパに行った] お金

従って、(34ab)の容認性は、それらの派生に(35ab)の関係節が含まれており、その関係節の派生に関わる依存関係が下接の条件の違反を含んでいるのであって、「『半分』関係節」の派生に特有の演算子移動の特性を示しているとは即断できない。

また、Ishii (1991) の分析では、「お金」にかかわる例文では「稼ぐ」「使う」が使われている。しかし、次のような例では、問題になっているものが何であるのかわからない。

(36) A が B に {あげた / 渡した / 送った} 半分を C が D に {あげた / 渡した / 送った}。

このことは、「量関係節」の内部に関係節が存在し、その主要部を派生の中で明示することが必要であることを示している。われわれの分析では、この内部の関係節が占める位置が「量」などを主要部とする「中核名詞句」の指定部を占める。

本分析も「量関係節」の派生に演算子移動を用いるが、それは「量」「半分」などを主要部とする「中核名詞句」の内項から DP 指定部に移動するものである。(26) の「量関係節」は次の構造と派生によるものである。

(37)  $[_{DP}Op_x[_{NP}[マリが1ヶ月に稼ぐお金]_{N'} x [_N\{半分/額\}]]]$

#### 4.3 「量関係節」と「潜伏疑問」

「量関係節」として成立する表現は、それが現れる選択的環境によって「潜伏疑問」として解釈できる。

- (38) a. 警察はタカシが飲んだ（ビールの）量を調べている。  
 b. 母親はマリが1ヶ月に稼ぐ（お金の）額を知りたがっている。

これらはそれぞれ次のような「中核名詞句」から派生される。

(39) a.  $[_{DP}[_{NP}[タカシが飲んだビール]_{N'} Op [_N\text{量}]]]$   
 b.  $[_{DP}[_{NP}[マリが1ヶ月に稼ぐお金]_{N'} Op [_N\text{額}]]]$

これらの内項を占める演算子 Op が CP 指定部に移動することで (38ab) が得られるのだが、これらは次のように内項の位置を WH 要素が占める「中核名詞句」から派生する間接疑問文を含む構造との平行性を持つものである。

- (40) a. 警察は何リットルがタカシが飲んだ（ビールの）量（である）かを調べている。  
 b. 母親はいくらがマリが1ヶ月に稼ぐ（お金の）額（である）かを知りたがっている。

#### 4.4 「量関係節」の指定部

Ishii (1991: 224) は「『半分』関係節」の統語的派生には演算子移動が関わっており、移動によって生み出される「空所」（ギャップ）が義務的に必要だと主張している。この点の証拠として、Ishii は次の例 (Ishii 1991: 225, 例 (3)) を提示し、これに容認不可 (\*) の判断をつけている。



(41) John は Bob が家賃にお金を使う 半分を ギャンブルに使う。

しかし、この文の容認性に問題があるとは思えない。われわれの分析では、ここに見られる『半分』関係節は次のような「指定文」と関連づけて考えられる。

(42) 10万円が Bob が家賃にお金を使う 半分だ。

この文は次の「中核名詞句」から派生される。

(43)  $[_{NP}[\text{Bob が家賃にお金を使う}]]$  (ことの)  $[_{N'}10 \text{万円 (という)}]$   $[_N \text{半分}]]$

ここでは「半分」が「Bob が家賃にお金を使う」という事象と「10万円」という「値」との「関係」を表すと考えられる。(41)の『半分』関係節は、(44)の内項の「値」として演算子が置かれ、これがDP指定部に移動して変項を作る。

(44)  $[_{DP}Op_x[_{NP}[\text{Bob が家賃にお金を使う}]]$  (ことの)  $[_{N'} x [_N \text{半分}]]$

次の文でも、空所を含まない「量関係節」が観察される<sup>4</sup>。

(45) タカシがビールを飲んだ 倍 (の) ワインをマリが飲んだ。

#### 4.5 「量関係節」と主要部内在型関係節

前節で見た空所を含まない「量関係節」は、主要部内在型関係節の特性を持っている。Nishigauchi (2004) は、主要部内在型関係節が成立するためには節の中で主要部として働く表現—典型的には不定名詞句—の意味対象の存在が含意されることが必要であるとしている。

まず、指定部の関係節に否定が含まれていると、次のような対比が観察される。

(46) a. タカシが飲まなかったビールの倍のワインをマリが飲んだ。

b. \*タカシがビールを飲まなかった倍のワインをマリが飲んだ。

(46b)の「タカシがビールを飲まなかった」という節がビールの存在を含意しないことが(46b)が(46a)に比べて容認性が低いことを説明する。

次の「創造」(creation)に関わる文脈を含む文でも対比が見られる。

(47) a. タカシが書いている本の倍 長い論文を マリが書いている。

b. \*タカシが本を書いている倍 長い論文を マリが書いている。

「タカシが本を書いている」時点では本の存在が含意されないことが(47b)の容認性が低いことを説明する。

次のような「願望」を表す文でも同様の対比が見られる。

<sup>4</sup>村杉(1997)は同様の「量関係節」の例をあげている。

- (48) a. タカシが飲みたがっているビールの倍のワインをマリが飲みたがっている。  
 b. \*タカシがビールを飲みたがっている倍のワインをマリが飲みたがっている。

「タカシがビールを飲みたがっている」は特定のビールの存在を含意しない。同じ対比がモダリティに関わる文に見られる。

- (49) a. タカシが飲むかも知れないビールの倍のワインをマリが飲みたがっている。  
 b. \*タカシがビールを飲むかも知れない倍のワインをマリが飲みたがっている。

次の例文は、「存在の含意」が関与することを違う角度から示している<sup>5</sup>。

- (50) タカシは小麦粉をミルク、卵、砂糖と混ぜた量をはかっている。

この種の例は「潜伏疑問」の形でなければ作りにくい。この文で量をはかられているのは小麦粉をミルク、卵、砂糖と混ぜた結果できたものであって、節の中には関係節の主要部と言えるものがない、いわば「主要部潜在型」とでも呼ぶべきものである。

また、この構文は「Spray paint 交替」(*Spray paint hypallage*)の効果を示す。

- (51) a. 101 教室に花をかざった半分を 102 教室にかざった。  
 b. ??101 教室を花で かざった 半分で 102 教室をかざった。

Nishigauchi (2004) は、不定名詞句を含む *thetic judgment* (Kuroda 1972) を形成するとき最適な「主要部内在型関係節」が得られると述べている。(51a)は「花」に関する *thetic judgment* を表すと考えられる。

## 5 「変項名詞句」の主要部

### 5.1 2種の「変項名詞句」

(1)に例示した「変項名詞句」の主要部は語彙的特性として「非飽和名詞」と呼べるものである。しかし、西山(2003: 72-92)にはさまざまな名詞句が「変項名詞句」としてはたらく例を示している。

- (52) a. 太郎は洋子の趣味を尋ねた。(西山 2003: 80, 例 (50a))  
 b. 花子は自分の欠点がわからないようだ。(西山 2003: 80, 例 (53a))  
 c. 客は、その本の定価に関心がある。(西山 2003: 80, 例 (54a))

これらは、3.1 節で見た「非飽和名詞」を主要部とする「中核名詞句」から派生されるものである。(52a)を例にとると、この文は(2a)の「指定文」と関連づけられる。

<sup>5</sup>この例文は、金水(1999)で議論されている代名詞の例からインスピレーションを受けたものである。

(2) a. 海外旅行が洋子の趣味だ。

この「指定文」は(8)の「中核名詞句」から派生される。

(8) [<sub>NP</sub> 洋子の [<sub>N'</sub> 海外旅行 (という) [<sub>N</sub> 趣味]]]

(8)の内項「海外旅行」を焦点化することで(2a)が派生される。

(52a)の「洋子の趣味」は、3.1節で示したように、(8)の内項に演算子が置かれ、これが「中核名詞句」の直上にあるCP指定部に移動して内項の位置に作られた変項を束縛する。

(53) [<sub>CP</sub> Op<sub>i</sub> [<sub>NP</sub> 洋子の [<sub>N'</sub> t<sub>i</sub> [<sub>N</sub> 趣味]]]]

一方、西山(2003)によって提示されている次の例文に含まれる「変項名詞句」は、異なった構造と派生を持つ。

- (54) a. 警察官は、その女の子に彼女の通っている小学校をきいた。(西山 2003: 79, 例(47))  
 b. 山本教授は、鈴木助手の研究している細菌を問いただした。(西山 2003: 80, 例(49a))  
 c. 母に問いつめられて、わたくしは、ついに自分の好きなひとを白状した。(西山 2003: 80, 例(51a))  
 d. 刑事は、盗難車の写真リストを太郎に見せながら、太郎がその時目撃した車を尋ねた。(西山 2003: 80, 例(52a))

これらの例文の下線部はいずれも「変項名詞句」として機能し、これらの例でもいずれも「潜伏疑問」の意味解釈を生み出している。これらの名詞句の内部構造は、(52a-c)の「非飽和名詞」を含む「変項名詞句」とは異なったものであることを示していく。

まず第一に、これらの下線部の名詞句が「変項名詞句」としてはたらくのは、それぞれの発音される形式の主要部をなす名詞によるのではない。「小学校」「細菌」などに「非飽和名詞」としての用法があるのではないということである。ここから考えられることは、これらの名詞句の真の主要部は発音される形式のそれではないのではないかということである。そして、ここで思い出してよいのは、「量関係節」の議論の中で主要部の「量」「(総)額」が発音されない文が可能だったという事実である。(20b), (31)などがそれを示す例文だった。

(20) b. 2リットルがタカシが飲んだビールの量だ。

(31) 25万円がマリが1ヶ月に稼ぐお金の(総)額だ。

さらにヒントとなるのは、(54a-d)の下線部の名詞句に「の名前」をつけると、それぞれが意図されると思われる意味に近いものが得られるということである。

- (55) a. 警察官は、その女の子に彼女の通っている小学校の名前をきいた。  
 b. 山本教授は、鈴木助手の研究している細菌の名前を問いただした。  
 c. 母に問いつめられて、わたくしは、ついに自分の好きなひとの名前を白状した。  
 d. 刑事は、盗難車の写真リストを太郎に見せながら、太郎がその時目撃した車の名前を尋ねた。

## 5.2 主要部 'ID'

本分析で提案したいのは、(54a-d)の下線部の名詞句は「名前」に近い意味を持つ主要部を持ち、「量関係節」と平行した構造を持った「中核名詞句」から派生するということである。この主要部名詞は「名前」などと同じクラスに入るが発音されることがないもので、'identity' という意味をもつ ID という要素であると仮定する。これによると、(54a)の下線部は次のような「中核名詞句」から派生される。発音される下線部の関係節は、この「中核名詞句」の指定部を占めている。

- (56)  $[_{NP} [_{NP} \text{彼女の通っている小学校}] \text{(の)} [_{N'} A \text{小学校 (という)} [_{N} \text{ID}]]]$

この「中核名詞句」の内項を焦点化することで、次の「指定文」が得られる。

- (57) A 小学校が彼女の通っている小学校だ。

内項の位置に演算子を生成し、これを CP 指定部に移動することで、(54a)の下線部の構造が得られる。

- (58)  $[_{CP} \text{Op}_x [_{NP} [_{NP} \text{彼女の通っている小学校}] [_{N'} x [_{N} \text{ID}]]]]]$

次の節で、このような構造を仮定する統語的な根拠を提示する。

## 5.3 2種の「変項名詞句」の構造

5.1 節で、「変項名詞句」に2種あることを主張した。「非飽和名詞」を主要部とするものと、identity をあらわす、発音されない ID を主要部とするものである。この節では、この2種の「変項名詞句」の構造上の違いについて考える。

この問題を考えるために、次のペアの表現を見てみよう。

- (59) a. 鈴木教授の愛読書  
 b. 鈴木教授が好んで読む本

- (60) a. 山田さんの愛車  
b. 山田さんがいつも乗る車

(59a)の「愛読書」、(60a)の「愛車」はともに「非飽和名詞」と呼べる「中核名詞句」の主要部となれるものである。(59b), (60b)はそれぞれと意味が近いと思われる句表現を含まれるものである。これらはいずれも次のように「指定文」を形成することができる。

- (61) a. 『一般言語学講義』が鈴木教授の愛読書だ。  
b. 『一般言語学講義』が鈴木教授が好んで読む本だ。  
(62) a. ミニ・クーパーが山田さんの愛車だ。  
b. ミニ・クーパーが山田さんがいつも乗る車だ。

われわれの分析では、(61a), (62a)はそれぞれ次の「中核名詞句」から派生される。

- (63) [<sub>NP</sub> 鈴木教授 (の) [<sub>N'</sub> 『一般言語学講義』 (という) [<sub>N</sub> 愛読書]]]  
(64) [<sub>NP</sub> 山田さん (の) [<sub>N'</sub> ミニ・クーパー (という) [<sub>N</sub> 愛車]]]

一方、(61b), (62b)はそれぞれ次の「中核名詞句」から派生される。

- (65) [<sub>NP</sub> 鈴木教授が好んで読む本 (の) [<sub>N'</sub> 『一般言語学講義』 (という) [<sub>N</sub> ID]]]  
(66) [<sub>NP</sub> 山田さんがいつも乗る車 (の) [<sub>N'</sub> ミニ・クーパー (という) [<sub>N</sub> ID]]]

(63), (64)では「鈴木教授」「山田さん」がそれぞれ「中核名詞句」の指定部を占めているが、(65), (66)ではそれぞれ「中核名詞句」の指定部の一部となっている。この構造上の違いを明らかにする方法として、不定・量化名詞句による代名詞束縛の可能性を見ることがある。

- (67) a. そ<sub>i</sub> (いつ) の著書が [ほとんどの教授]<sub>i</sub> の愛読書だ。  
b.?\* そ<sub>i</sub> (いつ) の著書が [ほとんどの教授]<sub>i</sub> が好んで読む本だ。  
(68) a. そ<sub>i</sub> (いつ) の会社の製品が [ほとんどの技術者]<sub>i</sub> の愛車だ。  
b.?\* そ<sub>i</sub> (いつ) の会社の製品が [ほとんどの技術者]<sub>i</sub> がいつも乗る車だ。

(67ab)の派生にかかわる「中核名詞句」は次のものである。

- (69) a. [<sub>NP</sub> [ほとんどの教授]<sub>i</sub> (の) [<sub>N'</sub> そ<sub>i</sub> (いつ) の著書 (という) [<sub>N</sub> 愛読書]]]  
b. [<sub>NP</sub> [ほとんどの教授]<sub>i</sub> が好んで読む本 [<sub>N'</sub> そ<sub>i</sub> (いつ) の著書 [<sub>N</sub> ID]]]

(69a) では「ほとんどの教授」が指定部をなしており、内項の中の代名詞「そ (いつ)」を c 統御しているのに対し、(69b) では「ほとんどの教授」が指定部に含まれており、代名詞を c 統御していないことが (67ab) の容認性の対比を説明する。

この考察は、西山 (1990) で言及されている、「好んで読む本」が「非飽和名詞句」として働くという可能性を否定するものである。そのような構造が可能であれば、(67b) の構造として次のようなものが存在することになる。

(70)  $[_{NP} [\text{ほとんどの教授}]_i (\text{の}) [_{N'} \text{そ}_i (\text{いつ}) \text{の著書} (\text{という}) [_{N} \text{好んで読む本}]]]$

このような構造・派生が存在すれば、「中核名詞句」の中で「ほとんどの教授」が代名詞を c 統御することになり、(67b) で量化名詞句による代名詞束縛の解釈が可能であることが予測されるが、これは事実と反する予測である。このことは (70) の構造および「非飽和名詞句」というものが存在しないことを示している。

他方、次の例文では、不定・量化名詞句による「逆行束縛」に関する対比が見られない<sup>6</sup>。

- (71) a.  $\text{そこ}_i \text{の顧問弁護士が } 50\% \text{ 以上の会社}_i \text{の訴訟相手だ。}$   
 b.  $\text{そこ}_i \text{の顧問弁護士が } 50\% \text{ 以上の会社}_i \text{が裁判で争う相手だ。}$

ここでのポイントは、(71b) での「逆行束縛」が (67b), (68b) におけるそれよりも、いずれもコンピュータ「だ」の直前に関係節が現れているにもかかわらず、容認性が高いことである。(71b) での「逆行束縛」が容認性が高い事実をどう説明すればよいのだろうか。

(71b) について指摘できる重要なポイントは、そこに見られる関係節の主要部が「相手」という「非飽和名詞」であるということである。このことを背景として、(71b) は次のような文構造から派生すると考えることが可能である。

(72)  $50\% \text{ 以上の会社}_i \text{が } [_{\alpha} \text{そこ}_i \text{の顧問弁護士} (\text{という}) [\text{相手}]] \text{ と裁判で争う} (\text{のだ}) \text{。}$

ここで、「中核名詞句」 $\alpha$  を主要部とする関係節を作ってみる。Kayne (1994), Vergnaud (1974) で提案されている、主要部繰り上げによる関係節の派生に従って、構成素  $\alpha$  を関係節主要部の位置へ移動することによって関係節を作る。

(73)  $50\% \text{ 以上の会社}_i \text{が } \_\_ \text{裁判で争う } [_{\alpha} \text{そこ}_i \text{の顧問弁護士} (\text{という}) [\text{相手}]] (\text{だ}) \text{。}$

この構造の  $\alpha$  の内項「そこ<sub>i</sub>の顧問弁護士」を焦点化することで (71b) が派生される。

また (61ab), (62ab) に対応して「鈴木教授」「山田さん」の位置の項を主要部とする関係節を作ってみると、次のような差違が見られる。

- (74) a. 『一般言語学講義』が愛読書である教授  
 b.?? 『一般言語学講義』が好んで読む本である教授

<sup>6</sup>金水敏氏の指摘による。

- (75) a. ミニ・クーパーが愛車である 技術者  
 b.??ミニ・クーパーがいつも 乗る 車である 技術者

日本語の関係節の派生に演算子移動ないし主要部移動という何らかの移動操作が関わっているとすれば, (74a), (75a) では「中核名詞句」の指定部全体に相当する構成素が移動するのに対し, (74b), (75b) では「中核名詞句」の指定部にある関係節の中からの移動を含むことになり, 複雑名詞句制約の違反で容認性が低いことが予期される。もし「非飽和名詞句」というものが存在し, (70) のような構造が可能であれば, 指定部全体の移動のオプションが生まれ, ここに見られる対比は存在しないという予測をすることになる。

#### 5.4 「総記」

ここで仮定する主要部 ID は「中核名詞句」の指定部を占める記述表現 X について「X が何(誰)であるか」という意味での identity を表し, 「中核名詞句」の内項を占める要素がその答え, ないし「値」を表すものである。(56) の場合で言えば, 「彼女の通っている小学校が何であるか」の答えないし「値」が内項の「A 小学校」である。

逆の観点から言うと, 「X が何(誰)であるか」の X の位置に置いて意味をなさない記述表現は問題の ID を主要部とする「中核名詞句」の指定部の位置に置くことができない。そのようなケースとして, 西山(1990)で議論されている次の記述表現の違いを考えることができる。

- (76) a. タカシのカサ  
 b. タカシが大切にしているカサ

「タカシが大切にしているカサが何であるか」に比べて「??タカシのカサが何であるか」は容認性が低い。前者なら「グッチだ」という答えが考えられるが, 後者は文脈にある「これだ」ぐらいしか考えられない。しかしそれは「タカシのカサがどれであるか」に対する答えであり, その違いは些細なものではない。

(76b) なら次のような「中核名詞句」の指定部に現れることができるが, (76a) はこのような構造に参加することができない。

- (77)  $[_{NP} [_{NP} \text{タカシが大切にしているカサ}] \text{(の)} [_{N'} \text{グッチ (という)} [_{N} \text{ID}]]]$

- (78)  $*[_{NP} [_{NP} \text{タカシのカサ}] \text{(の)} [_{N'} \text{グッチ (という)} [_{N} \text{ID}]]]$

「??タカシのカサが何であるか」が容認性が低い理由について考えてみよう。西山(1990)は(76ab)のいずれも「指定文」を作ることができるとして, 次のような文を提示している。

- (79) a. これが タカシのカサだ。  
 b. これが タカシが大切にしているカサだ。

ここで重要なのは、これらいずれの文も焦点となっているのが「これ」という文脈依存性の高い要素だということである。次のような文脈依存と関係ない表現を焦点にもちいると、微妙な差異が生じる。

- (80) a. (#)グッチがタカシのカサだ。  
 b. グッチがタカシが大切にしているカサだ。

(80a) は容認不可とは言えないが、使える文脈が限定されている。(80a) は、その場にグッチのカサ、プラダのカサ、シャネルのカサがあり、それらの中でどれがタカシのカサか、という問いに対する答えとしてといった文脈が必要である。

西山 (1990) は (79a) について、それが「カキ料理構文」に関連づけられないことを指摘している。

- (81) \*タカシはこれがカサだ。

この現象は、西垣内 (2015) で議論している、(82a) が (82b) に関連づけられないという現象と平行する問題である。

- (82) a. 花子が、この病院の{看護師 / 医師}だ。  
 b. \*この病院は、花子が{看護師 / 医師}だ。

西山 (2003) は (82a) を「指定文」と考え、「この病院」に主題化をかけて (82b) を導くことができないことを問題と考えている。

- (83) [<sub>NP</sub> この病院の [<sub>N'</sub> 花子 (という) [<sub>N</sub> 看護師]]]

通常の場合で、病院に看護師が複数いる場合、この構造の内項である「花子」は「この病院の\_\_看護師」を過不足なく構成するとは言えず、(83) は「中核名詞句」の要件を満たしていないのである。

にも関わらず (82a) の容認性が低くないのは、この文が「(この3人の中で) 誰がこの病院の看護師ですか？」の答えとなる「総記」の解釈が可能だからである。われわれの分析では、(82a) は次のような「中核名詞句」から派生すると考えることができる。

- (84) [<sub>NP</sub> (この3人の中での) [<sub>N'</sub> 花子 (という) [この病院の看護師]]]

「中核名詞句」の外項つまり指定部に現れる項は主要部 N の意味的領域・範囲を限定するものである。この限定する要素として、「この文脈で」「この3人の中での」を意味する談話演算子 (discourse operator) の存在を仮定するのである。

この線に沿って、(76a) は、(85a) ではなく、(85b) のような「中核名詞句」から派生される。



- (85) a. [<sub>NP</sub> タカシの [<sub>N'</sub> これ (という) [カサ]]]  
 b. [<sub>NP</sub> (この文脈の中での) [<sub>N'</sub> これ (という) [タカシのカサ]]]

(85b)の「中核名詞句」の内項を焦点化することで、(79a)が得られる。

- (86) これが [<sub>NP</sub> (この文脈の中での) [<sub>N'</sub> ~~これ (という)~~ [タカシのカサ]]] だ。

西垣内 (2015) の分析では、「中核名詞句」の指定部を占める要素を TopP 指定部へ移動することで「カキ料理構文」が派生される。この分析では、移動するのは(86)の「この文脈の中での」という「談話演算子」である。

- (87) (この文脈の中では) これが [<sub>NP</sub> ~~(この文脈の中での)~~ [<sub>N'</sub> ~~これ (という)~~ [タカシのカサ]]] だ。

この「談話演算子」を発音しなければ、結果得られるものは(79a)と発音上同じである。

これまで見てきた構造上の差異が、次の間の対比に反映している。

- (88) a. ??みんなはタカシのカサを知りたがっている。  
 b. みんなはタカシが大切にしているカサを知りたがっている。

(88b)は、みんなの関心がタカシのカサがどのブランドであるかなどの解釈が可能であるが、(88a)が容認されるのは、何本かのカサがあって、みんなが知りたがっているのはそれらの中のどれがタカシのカサであるかという状況に限られる。

われわれの分析では、「タカシのカサ」は次のような構造を持っている。

- (89) [<sub>CP</sub> Op<sub>x</sub> [<sub>NP</sub> (この文脈の中での) [<sub>N'</sub> x [タカシのカサ]]]]

この構造では、演算子移動で作られた変項の値が「この文脈の中で」によって限定される。これが、(88a)の解釈についての直感を説明する。

## 5.5 主要部内在型関係節

4.4節および4.5節で、我々が「量関係節」と考える構造の指定部に空所(ギャップ)のない節があらわれるケースについて観察した。そこで見たのは、関与する例が「主要部内在型関係節」の特性を持つことだった。本節では、一般に「主要部内在型関係節」と呼ばれているものは、前節までに見ている、「ID」という非飽和名詞を主要部とする「中核名詞句」から派生するものであることを示していく。

本分析の考えでは、次のような「指定文」「倒置指定文」が「主要部内在型関係節」の原型と言えるものである。

- (90) a. ??これらがリンゴが皿の上にあったのだ。  
 b. リンゴが皿の上にあったのはこれらだ。

(90a)の指定文は容認性が低いが、これは次の「中核名詞句」から「これら」を焦点化することで派生される。

- (91)  $[_{NP} [_{IP} \text{リンゴが皿の上にあった (の)} ] [_{N'} \text{これら } [_{N} \text{ID}]]]$

さらに(91)の焦点移動の残余であるNPを主題化することでより容認性の高い(90b)の「倒置指定文」が得られる。

われわれの分析では、(91)の内項「これ」の位置に演算子Opを生成し、これをDP指定部の位置に移動することで問題の「主要部内在型関係節」が得られる。

- (92)  $[_{DP} \text{Op}_x [_{NP} [_{IP} \text{リンゴが皿の上にあった (の)} ] [_{N'} x [_{N} \text{ID}]]]]]$

Shimoyama (1999) は、「主要部内在型関係節」はその解釈にEタイプ代名詞 (E-type pronouns, Evans 1980) が関わることを主張している。

- (93) a. John は Mary が 3 個のリンゴを むいてくれたのを食べた。(Hoshi 1995: 131)  
 b. John は Mary が むいてくれた 3 個のリンゴを 食べた。

通常の関係節を含む(93b)では、3個のリンゴについて、それらをMaryがむいてくれて、Johnが食べたという叙述がなされている。これは、真偽条件でいうと、Maryがむいてくれたのは5個のリンゴでJohnが食べたのはそのうちの3個であるという状況でも真でありうる。

それに対し、(93a)が意味するのは、Maryがむいたのは3個のリンゴであり、Johnがそれらを食べたという解釈であり、上記のMaryが5個のリンゴをむいた状況では偽となる。

Eタイプ代名詞は、Evans (1980: 339)の次の例文によって例示されるものである。

- (94) Few congressmen admire Kennedy, and they are very junior.

この文が意味するのは、Kennedyを尊敬し、かつきわめて未熟である議員が少数だと言っているのではなく、Kennedyを尊敬する議員は少数だが、その人たちは全員未熟だと言っているのである。

われわれの分析では、(93a)の「主要部内在型関係節」は次の「中核名詞句」と関連づけられる。

- (95)  $[_{NP} [_{IP} \text{Mary が 3 個のリンゴを むいてくれた (の)} ] [_{N'} \text{これら } [_{N} \text{ID}]]]$

この分析で一貫して主張してきているのは、「中核名詞句」の内項は指定部の要素で限定される主要部の意味を過不足なく指定するものである。さらに、上で言及したNishigauchi (2004)の、「主要部内在型関係節」の成立条件である「存在の含意」(existential implication)を考慮に入れると、(95)の内項「これら」の意味は次のように説明される。

- (96) 「これら」 = 「Mary が3個のリンゴをむいてくれた」によって存在を含意されるものの identity を過不足なく指定する表現

これはまさに Evans (1980) の E タイプ代名詞の働きと考えられる。

(95) の内項の位置に演算子を置き、これを DP 指定部に移動したものが、われわれの分析による (93a) の「主要部内在型関係節」の構造である。

- (97)  $[_{DP} Op_x [_{NP} [_{IP} \text{Mary が 3 個のリンゴをむいてくれた (の)} ] [_{N'} x [_{N} ID]]]]$

われわれの分析では、この「中核名詞句」の内項に作られた変項が E タイプ代名詞に相当する。

ここでいう「主要部」を統語的にスペルアウトする必要がないことは、次の例文によって示される<sup>7</sup>。

- (98) a. 小麦粉をミルク、卵、砂糖と混ぜたのをフライパンに広げた。  
b. 水をかちかちに凍らせたのをこなごなに砕いた。

これらの文が意味しているのは、小麦粉をフライパンに広げたのでも、水を砕いたのでもなく、「の」を主要部とする節の中で存在を含意されるものについての叙述である。

### 5.6 「主要部内在型関係節」と「潜伏疑問」

われわれの分析では、「主要部内在型関係節」は「量関係節」と平行した構造を持つ、「ID」を主要部とする「中核名詞句」から派生する「変項名詞句」であるという主張をしてきた。これまで、「変項名詞句」には「潜伏疑問」としての用法が存在することを見てきた。この観点から、「主要部内在型関係節」に「潜伏疑問」としての用法があるかどうかの本分析に特有の関心事となる。答えはノーであり、「主要部内在型関係節」が「潜伏疑問」として用いられることはない。

- (99) \*タカシは マリがりんごを 皿の上に 置いたのを知りたがっている。

この文が容認不可であることについてはいくつかの説明が可能で、Kuroda (1992) による、関係節の内容と主節の語用論的内容との「関連性」(relevancy) にもとづく説明も可能であるが、本分析に特有の、「中核名詞句」からの派生に基づく説明が可能である。

本分析では、(99) の「主要部内在型関係節」は次の「中核名詞句」から派生する。

<sup>7</sup>このような関係節を Tonosaki (1998) は「変化関係節」(change relatives) と呼んでいる。このような関係節は (i) 「の」を形容詞などで修飾できる、(ii) 「の」のかわりに「やつ」を使うことができるなどの特性があるとされる。しかし、

- (i) a. \*トウガラシが皿の上にある辛そうなの  
b. ?トウガラシを皿の上に盛った辛そうなの

の間には容認性の違いがあるように思われる。(ib) には「状態の変化」が含まれているとは思えないが、容認性が完璧ではないものの、かなり高いと思われる。「変化関係節」の「変化」の本質が何であるかについて慎重な考察が必要である。

(100) [<sub>NP</sub> [<sub>IP</sub> マリがりんごを 皿の上に 置いた (の) ] [<sub>N'</sub> Op [<sub>N</sub> ID]]]

3.2 節で見たように、「潜伏疑問」が成立する時は「中核名詞句」の内項に置かれる演算子のかわりに WH 要素を置くことが可能である。

(101) [<sub>NP</sub> [<sub>IP</sub> マリがりんごを 皿の上に 置いた (の) ] [<sub>N'</sub> 何 [<sub>N</sub> ID]]]

この「中核名詞句」は、次の「倒置指定文」と関連づけられる。

(102) \*マリがりんごを 皿の上に 置いたのは 何ですか？

「主要部内在型関係節」がその主要部である名詞句の指示対象の存在を含意するものであるとすれば、(102) は関係節の中で「りんごがある」と言いながら主節で「それは何か」と尋ねていることになることが(102)が容認不可であることの理由である。(99)が容認不可であるのは、そこに含まれる「潜伏疑問」が成立するためには、それが(102)の表す意味を持たなければならないことによる。

## 6 結論

この論文では、「量関係節」「潜伏疑問」そして「主要部内在型関係節」が西山(2003)が「変項名詞句」と呼ぶもののヴァリエーションであり、いずれも西垣内(2015)で「中核名詞句」と呼んだものから派生するものであることを示した。

「量関係節」は「量」を表す名詞を主要部とし、その指定部に量をはかる対象となる名詞句が関係節のかたちであられるものである。これまで「主要部内在型関係節」と呼ばれてきたものは、本分析の立場からは、「量関係節」と平行した構造を持つものであり、identity を表す ID という発音されない名詞をその主要部とするものである。

このように、「中核名詞句」の主要部として「量」(amount), ID (identity) を提案したが、もうひとつ「程度」(degree) という主要部があると思われる。これが比較構文の構造と派生に関わっていると考えられる。この線に沿った比較構文の分析が、本研究プログラムの方向性を示すものである。

## 謝 辞

この論文は、国立国語研究所共同研究プロジェクト(基幹型)「日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究」第8回研究発表会での発表のためにまとめたものである。発表に際して貴重なコメントを頂いた研究発表会参加者のみなさん、特に江口正、金水敏、村杉恵子、富岡論、外池滋生各氏に謝意を表したい。

また、本研究の一部は日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(C)「『視点』とモダリティの言語現象—『意識』, エンパシー, 阻止効果—」(平成26年度~平成29年度、研究代表者: 西垣内泰介, 課題番号: 26370468))による援助を受けている。

## 参 照 文 献

- Carlson, Greg N. (1977) Amount relatives. *Language* 53, 520–542.
- Evans, Gareth (1980) Pronouns. *Linguistic Inquiry* 11, 337–362.
- Higgins, Francis Roger (1973) The pseudo-cleft construction in English. Ph.D. dissertation, MIT. Cambridge, Mass.
- Hoshi, Koji (1995) Structural and interpretive aspects of head-internal and head-external relative clauses. Ph.D. dissertation, University of Rochester.
- Ishii, Yasuo (1991) Operators and empty categories in Japanese. Ph.D. dissertation, University of Connecticut.
- Kayne, Richard S. (1994) *The antisymmetry of syntax*. Cambridge, MA: Mit Press.
- 菊地康人 (1996) 「XがYがZ」文の整理—「XはYがZ文」との関連から—『東京大学留学生センター紀要』 6: 1–46.
- 金水敏 (1999) 「日本語の指示詞における直示用法と非直示用法の関係について」『自然言語処理』 6, 4: 67–91.
- Kuroda, S.-Y. (1972) The categorial and the thetic judgment: Evidence from Japanese syntax. *Foundations of language*, 153–185.
- Kuroda, S.-Y. (1992) Pivot-independent relativization in Japanese. In: *Japanese syntax and semantics*, 114–174. Dordrecht: Springer.
- 村杉恵子 (1997) 「「半分」を主要部にもつ複合名詞句: その構造と文法特性」『金城学院大学論集. 英米文学編』 38: 279–298.
- Nishigauchi, Taisuke (2004) Head-internal relative clauses in Japanese and the interpretation of indefinite NPs. *Theoretical and Applied Linguistics at Kobe Shoin* 7, 113–130.
- 西垣内泰介 (2015) 「「指定文」および関連する構文の構造と派生」, 国立国語研究所共同研究プロジェクト (基幹型) 「日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究」第7回研究発表会発表原稿.
- 西山佑司 (1990) 「「カキ料理は広島が本場だ」構文について—飽和名詞句と非飽和名詞句」『慶応義塾大学言語文化研究所紀要』 22: 169–188.
- 西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論: 指示的名詞句と非指示的名詞句』 東京: ひつじ書房.
- Shimoyama, Junko (1999) Internally headed relative clauses in Japanese and E-type anaphora. *Journal of East Asian Linguistics* 8 2, 147–182.
- Tonosaki, Sumiko (1998) Change-relatives in Japanese. *Journal of Japanese Linguistics* 16, 143–60.
- Vergnaud, Jean-Roger (1974) French relative clauses. Ph.D. dissertation, Massachusetts Institute of technology.